プリ・キンダーガルテンスクール

訪問　証し集

2018 年 2 月 8 日（木）~16 日（金）

・上田 翼（札幌バプテスト教会）
・上田 輝（札幌バプテスト教会）
・エイカーズ 愛（小樽バプテスト教会）
・小原久世
・北村加奈子（同盟・高槻バプテスト教会）
・高良相子（恵泉バプテスト教会）
・丁野雅子（相模中央キリスト教会）
・中嶋名津子（浦和バプテスト教会）
・船本実幸（浦和バプテスト教会）
・小林洋一（長住バプテスト教会・ツアーチャプレン）
・松本素代美（多良見キリスト教会　プリ・キンダーガルテンスクール里親の会代表）

©2018 年 2 月 10 日　プリ・キンダーガルテンスクール開校式にて

プリ・キンダーガルテンスクールの訪問を終えて

2018 年 3 月 25 日
プリ・キンダーガルテンスクール里親の会
世話人会代表　　松本素代美

主のみ名を賛美いたします。
里親の皆様のお祈りに支えられ、２月８日～１６日までのプリ訪問を無事終える事が出来ました。今回参加した１１名中８名が初めての訪問でありました。其々がプリで体験した恵み・感謝・傷み・祈り等々の思いを、其々のことばで皆様にお届けいたします。

私たちの祈りの現場プリの状況は、決して楽観視できるような状態ではありませんでした。経済格差は更に深刻化し、権力による国民の思想信条への政治介入強化に驚愕いたしました。「プリ・キンダーガルテンスクール」の運営も、経済的に非常に厳しい現状を抱えていました。

しかしそのような中にあっても尚、神様に信頼し、子どもたちの可能性に希望を抱き献身していらっしゃる、モハンティ師をはじめとする沢山の同労者の方々にお会いすることが出来ました。2017 年 4 月にスタートした「プリ・キンダーガルテンスクール」の開校式を、私たちの訪問を待って、開催してくださいました。日本の里親の会を代表して私が皆様の祈りをお伝えしてまいりましたので、そのご挨拶させていただきましたものを添えて、皆様への感謝と御礼のご報告に代えさせていただきます。

在主

「キンダーガルテンスクール開校式挨拶」

プリキンダーガルテン里親の会　世話人会代表　　松本素代美

本日このような場所でご挨拶させていただけます光栄を、心より神さまに感謝いたします。
今回私たちは日本から 11 名でプリの地を訪問しました。私自身は今回で 3 度目の訪問になります。

私たちとプリとの出会いはもう 30 数年前になります。一人の日本人の学生がアメリカの神学校で一人のインドの学生と出会いました。その後それぞれが母国に帰り、一人は日本の神学校の教師となり、一人は自分の故郷で、子どもたちに神さまの愛と、教育を受けるチャンスを与えるためのホームを設立しました。遠いインドの地での働きが、やがて私たちの処にも届き、私たちにもその働きに参加させていただくチャンスを与えていただきました。

プリとの出会いは、私の人生を豊かにしてくれました。そして数えきれないほどの恵みを頂きました。この出会いを与えてくださった神さまのご計画を、心から感謝しています。

しかし、2016 年 7 月、31 年間続いた「プリ子どもの家」が閉鎖されたことは、日本の私たちにとっても大きな驚きと悲しみでした。私たちは神さまが、このプリの地で、また新しい働きを再開してくださることを信じて祈りました。そして、2017 年 4 月この「キンダーガルテンスクール」がスタートできたことは、私たちをどれ程元気にしてくれたかしれません。活きて働かれる神さまに心から感謝をいたしました。

私たちの背後には、色々な工夫と努力をして、インドの子どもたちへの愛を注いでくださる、約 150 名の里親のメンバーの方々の祈りがあります。その中には一度もお会いしたことがない方々もいらっしゃいます。そのメンバーの方々が心をこめてインドの子どもたちの未来のために祈り送金してくださる愛に、私はいつも励ましをいただくのです。

今世界の国は自国のことだけを考え、自分の幸せだけを考える人々で溢れています。しかし訪ねたことも、会ったこともない国の子どもたちへ愛を注ぎ、その子どもたちの未来のために祈る、沢山の仲間が日本にいることを知っておいてください。

このキンダーガルテンスクールに通学する子どもたちの笑顔は、私たちを元気にしてくれます。子どもたちの成長は、私たちの喜びで希望なのです。

インドと日本、距離は遠く離れていますが、いつも祈りで私たちは結ばれています。
これからも互いに祈りあい励ましあって、ともに歩んでいきましょう。

◎開校式にて　園舎のテープカット

プリ・キンダーガルテンスクール訪問の報告

札幌バプテスト教会　上田　翼

今回、プリ・キンダーガルテンスクールの開校式に参加しました。

インド訪問前に、私たちのために札幌教会には祈っていただき、さらに小学生からはピアニカや絵の具セットを献品してもらいました。また、これまでに札幌教会では何十年も古着などを送ってくださっていたことにも感謝です。

インド　プリ子どもの家は 30 数年前にプリ出身のモハンティ先生というインド人の牧師と、西南・神学部の小林先生がアメリカの神学校で共に学んだところから始まりました。モハンティ先生が貧困ゆえに教育を受けることが出来ず貧困の連鎖に巻き込まれている多くの人々を見て、子どもの家をスタートしました。その使命に共鳴した小林先生が日本バプテスト婦人連合に呼び掛けて日本からの支援が 30 年以上続きました。しかし、一昨年インド政府からの強い圧力によりプリ子どもの家は解散へと追い込まれました。モハンティ先生と日本からの支援者の祈りによって新たにプリ・キンダーガルテンスクールが開校となりました。今回、プリ里親の会が支援と祈りを続けていることから里親の会代表の松本素代美さん、小林洋一先生、そして翻訳をしているエイカーズ愛先生が開校式に招待され、プリ里親の会の６名と、エイカーズ愛先生から英語を学び将来海外で仕えたいという

思いを分かち合っていた私と弟にも声がかかり、このような機会となりました。私の長年の夢だった海外の貧しい国の人の役に立ちたいという夢に一歩前進できた事は、私にとってはとても大きな恵みになりました。

旅に行くまではインドは、ホームレスや貧困の人々で溢れていて、不衛生な環境で生活しているイメージしかありませんでした。しかし実際にこの旅を終えて、日本での常識とはかけ離れていて、何事も日本のルール通りにはいかず、予想外の出来事が多くある事を体験出来た、とても刺激的な旅になりました。スクールの子どもたちも、スラムの環境で生活しており、臭いだったり、実際に会わないと感じられないようなことをイメージしていましたが、実際には送り迎えをしていた親と共に、とても真っすぐで素直に笑っていて、パワフルさもあり、清潔さもあり、非常識なこともせずに礼儀正しく出来ていました。これもプリ・キンダーガルテンスクールでの生活があってこそのことだと学びました。訪問した私たちが逆に元気と癒しをもらいました。今あるこの環境を最大限に活かし、一人でも多くの子がこのようなプリ・キンダーガルテンスクールに通えるように祈り、支援を続けていきたいです。この旅に参加し、たくさんの学びを与えくださった神さまに感謝します。

◎スクールの子どもたちとの交流

プリ・キンダーガルテンスクールへの訪問

札幌バプテスト教会　　上田輝

2018 年 2 月 8 日から 14 日までインドを訪れ、プリ・キンダーガルテンスクールの開校式に参加しました。初めてのインドの訪問は日本にいると考えられないことが日常的に起こったり、毎日が刺激的な日々でした。

今回行ったプリ・キンダーガルテンスクールは、以前はプリ子どもの家として 30 年以上前にプリ出身のモハンティ先生と福岡の神学校の小林先生がアメリカの神学校で共に学んだところから始まりました。その後 30 年日本からの支援が続いてきましたが、一昨年インド政府からの強い圧力により、プリ子どもの家は解散へと追い込まれました。それでもモハンティ先生はプリ・キンダーガルテンスクールを開校しなさいと神さまに命じられ、再び「プリ子どもの家里親の会」を中心に支援が呼びかけられました。

この 1 週間は本当に様々なことを経験しました。入国審査で英語が聞き取れず困っていたところにたまたま隣にいた日本語を話せるインド人の方に助けていただいたり、インドの国内線でトラブルがあり本来乗るはずの便に乗れなかったりと、プリに着く前からこの

ような出来事が起きて少し不安でした。また移動の疲れなどから開校式当日に体調を崩してしまい、同行していた方たちに経口補水液などをいただいたりと迷惑をかけてしまいました。それでも開校式に出席し子どもたちの姿を見ると本当に元気になりました。プリはお世辞にも治安が良いとは言えず、空気も悪いのにプリ・キンダーガルテンスクールの敷地に入ると想像以上にきれいな学校で、開校式には園児や保護者や地域の方々など 300 人ほどの人々が出席していて、学校に寄付をしてくれた方たちが紹介され感謝の気持ち表されていました。しかもまだ開校して 1 年も経っていないのに子どもたちが主の祈りやダンスを踊っている姿にすごく驚きました。それだけ先生方によるすばらしい教育ができているのだなと感じました。また、モハンティ先生がプリ子どもの家が閉鎖に追い込まれた時の状況を私たちに話してくれました。先生は閉鎖の危機があると知った時にはすごく悩み、神さまはなぜこのような試練を与えたのかと仰っていました。しかしこれは神さまからの計画なんだと気づくことができたのです。実際にもし閉鎖をせずに子どもの家を続けていたら、子どもたちから目を離す時間が多くなり世話をすることが困難になっていたというのです。そのようなこともあって、プリ・キンダーガルテンスクールを開校したことで子どもたちの居場所を残すことも支援を続けることもできて本当に神さまに感謝だなと感じました。日曜日には礼拝に出席しました。そこでは現地の中学生くらいの男の子たちと出会いました。彼らは最初は控えめに私たちを観察していたようでしたが、礼拝が終わると話しかけてきたり、近くのビーチまで連れてってくれて案内をしてくれたりと、非常に活発でとても明るく優しい子たちでした。

最初は日本との環境的な差や文化的な差があまりにも大きくて戸惑っていましたが、日が経つにつれて慣れてきてまだ居たいと思いました。また本当に感謝しかないような旅でした。そしてぜひこれからはプリ・キンダーガルテンスクールの支援を続けて、またもっと多くの方にも支援していただけるようにこの活動が広めればいいなと強く感じました。

◎訪問した 2 月はプリで一番寒い時期。セーターを着た子どもも

プリ・キンダーガルテンスクールを訪問して

小樽バプテスト教会　エイカーズ愛

主の御名を賛美します。この度はプリ訪問団のことをお祈りくださりありがとうございました。一昨年の夏、モハンティ先生が来日された際に、プリ子どもの家の尊いお働きの詳細を知り、いつか訪問したいと願っていましたが、その直後プリ子どもの家は閉鎖を余

儀なくされました。そうこうしているうちにモハンティ先生から新たにスタートした「プリ・キンダーガルテンスクール」の開校式への招待状をいただきました。

私の訪問が決まって以来、小樽バプテスト教会では私の牧師就任式で、記念品にプリの紅茶をお配りしたり、また出発直前の礼拝の中でも総務執事が祈ってくださり、このような多くの方々の祈りに押し出され出国しました。

土曜の開校式の日の朝、打ち合わせも兼ねて数名でモハンティ先生のオフィスに伺いました。前日の、日本ではありえない航空会社の対応で疲れていた私は、残念ながらインドでは日本のように物事は効率的に時間通りに進まないということを実感していましたし、皆さんが、お願いしたことを忠実に最後までやり遂げてくださるとは限らないということも知っていました。土曜の晩に行われる開校式の準備をこれまでモハンティ先生はじめスタッフが本当にご苦労なさって最善を尽くして来たということをよく知っていました。しかし、そのミーティングの初めにモハンティ先生がお祈りをしてくださり、その言葉にハッとさせられ、また涙がこぼれました。その祈りの言葉はこうでした。「聖霊なる神さま、あなたなしにこの幼稚園は存在しません。どうぞ、ここで行われるすべての業に責任を負っていてください。この幼稚園はわたしのものでは、ありません。これはすべてあなたのものです。あなたが遠い昔からこのためにご計画を持たれこのことが始められたと知っています。どうぞ、わたしたちを用いて、この働きを成し遂げさせてください。わたしたちに出来ることは僅かなことです。しかし、あなたはとても大きく、力をもっておられます。どうぞ、主よ、この幼稚園、そして子どもたちを祝福してください」。この祈りを聞く中で、私はそれまで全てを自分がコントロール出来るはずだと思っていたことが、いかに自己中心であったか、ということに気づかされました。そして、本当に身近な所にモハンティ先生のような、勤勉で、霊に燃え、主に仕え、決して妥協をしない戦う人、主に従い、忠実に仕えておられる人生の先輩がおられることを感謝し悔改めました。

日曜のプリ・バプテスト教会の礼拝では小林洋一先生がコヘレトの言葉４章 1 節～12節の箇所から力強くメッセージを取り次いでくださいました。連帯すること、共に労苦すること。慰め合うこと。どんな言葉も真の慰めはもたらさず、そこにじっと悲しみを一緒に通らされることを通して慰めを受ける。このメッセージを伺う中で、実にこの数年の間、わたしたちではどうしようもすることが出来ない課題の前に、共に言葉を失い涙を流すということを通り、しかしそれでも仲間がいたので、それを耐えうることが出来たことを神さまに感謝いたしました。

◎開校式で　感謝の花束とレイ、ストールを受け取る

多くの困難な環境や状況の中にあっても不思議と結ばれたプリと日本の繋がりを祈りと捧げ物で大切に紡いでいきたいと思います。プリと繋がることの中にしか見ることの出来ない喜びを分かち合っていきたい

と思います。

最後に、モハンティ先生らしいエピソードをひとつ。「開校式の準備で疲れているでしょう。」と土曜の朝、お声がけしたところ。「ノー。沢山の人達がわたしたちの働きのために祈っているから私は疲れない。目を閉じているのを見たら、それは祈っているか黙想をしているんだよ。」と言ってウィンクをしていました。来日された際に全行程をご一緒し暑い盛りの移動も重なり、居眠りを目撃したことがありましたが、今回、ユーモアの中にも御言葉によって押し出され祈りで支えられている先生の姿に励まされました。主はすばらしい♪

プリ・キンダーガルテン訪問記

小原久世

プリへの旅は快晴の朝、羽田空港から始まりました。
去年５月からメールでのやり取りしかしたことのない方たちと初めてお会いしたのです。
羽田から出発するのは私を含め 5 名でした。ご挨拶をして、チェックイン、セキュリティチェック、出国審査と進むにつれ、気分はすでにプリに飛んでいました。

バンコクまでの飛行機の中では幸いにも高良さんと隣同士になり、今まで 2 回訪問されたプリのお話、子どもたちの様子をうかがうことができました。子どもの家が閉鎖に追いやられたことに人一倍心を痛めていらっしゃいました。

バンコクでは札幌から 3 名、福岡から 2 名、関空から 1 名の方が合流しました。初めて参加する私に皆様から優しい言葉をかけてくださり、今日から始まる 8 日間の旅が素晴らしいものになることを確信しました。

バンガロールで一泊して、いよいよプリに向け出発です。バンガロールからブバネシュワールまで 2 時間のフライト。空港に着くと、いつも写真で拝見していたモハンティ先生が笑顔で出迎えてくださいました。

プリでの滞在は 5 日間。毎日のようにモハンティ先生のご自宅に招かれ、奥様の手料理をいただき、先生からいろいろなお話を聞かせていただきました。

2 年前に子どもの家を閉鎖せざるをえなかったことはニュースレター等を読んで知っているつもりでいました。けれども先生の口から直接その当時の状況を伺い、長い長い苦渋の時を知り、胸がつぶれる思いでした。先生だけでなく、みんなも涙を流しました。

プリに到着した夜に案内されたナオミビルディングはきれいに改装され、立派に見えました。けれど高良さんは３年前に訪ねた時の子どもたちの顔や声がよみがえって悲しそうでした。ただひとり再会できたのは先生の養女で 12 歳になったチェッキさんです。彼女は生まれてすぐ子どもの家の門の前に置かれていたそうです。

彼女は今では先生の立派なアシスタントとしてキンダーガルテンの手助けをしています。

2 月 10 日の夕方行われたキンダーガルテンの開校式の準備、子どもたちの着付けやお化粧も手伝っていました。式に参列した人々の誘導も。その働きぶりを見てキンダーガルテンの明るい未来が見えた気がしたのはたぶん私だけではないと思います。

開校式での子どもたちの楽しい歌やダンス。日本から来た私たちを含め、開校に尽力した多くの人たちがステージに上がりましたが、やはり主役は子どもたちでした。

翌朝訪れたキンダーガルテンの庭には日本から贈られた遊具がいくつもあり、そこで遊ぶ子どもたちの笑顔は私たちの旅の疲れを吹き飛ばしてくれました。

今回思いがけず長年の夢だったプリに行くことができました。20 年前、娘が通っていた小学校の授業参観で担任の先生から初めて「里親の会」の存在を知り、それ以来支援を続けてきました。教会に通っていない私を優しく受け入れてくださった皆様に感謝します。

そして、20 年間プリを通して私を導いてくださった神さまに感謝します。

◎日本からのお土産を手渡す

プリ訪問を終えて

同盟・高槻バプテスト教会　　北村加奈子

初めてのインド、そして、ほぼ初対面の方々と一緒、ということで緊張して行きましたが、いろいろな方々に温かく迎えていただき、感謝でした。

ナオミビルディング、プリ・キンダーガルテンスクールを実際に訪問して、本当にきれいで、子どもたちの身だしなみにもとても気を遣っておられるのを見て、少し埃っぽく、ごみが至る所に落ちている街中との差を感じ、とても感心しました。2 日間プリ・キンダーガルテンスクールを訪問し、子どもたちと交流する中で、先生たちが時に厳しく、愛情をもって子どもたちと接していたことがとても印象に残りました。モハンティ先生の教育理念を感じることができ、教育関係で働いている私自身も勉強になりました。人、特に小さな子どもたちと接することが得意ではない私にとって、子どもたちと遊んだりすることはかなりチャレンジングなことでしたが、周りの人たちの気遣いもあり、少し一緒に遊べたことも大きな経験でした。様々な賜物を持った方々と行動する中で、こういうところは参考にしたい、私自身も少し変わらなければ、と刺激を受けることが多く、このことも大きな恵みとなりました。

しかし、ヒンドゥー至上主義の影は私が思

◎子どもたちとの交流

っていた以上に色濃く、モハンティ先生たちがとても気を遣っておられることもわかりました。“God” はいいが、”Jesus” や “Hallelujah” は使ってはいけないと事前に言われていたことや、下校時にインド国歌を歌う光景を見て、その一端が垣間見えました。また、モハンティ先生がプリ子どもの家閉鎖の 4 年も前から政府関係者から嫌がらせ、脅迫などを受けていたことを今回初めて知ることとなり、背筋が凍る思いがしました。しかし、それにもめげず、本当に神さまに従うモハンティ先生の姿勢に頭が下がる思いがし、この事業への強い思いと確固たる信念を感じました。少数派のキリスト教徒や仏教徒などがさまざまな脅迫や嫌がらせを受け、特にムスリムに対してはひどい弾圧をしている話を聞き、日本で見聞きしていたことと同じだ、と思いましたが、その後に、政権が代われば政策も変わるので、状況も変わると言われたことにハッとしました。そのことにも希望を持っておられることにも強さを感じました。

短期的にも長期的にも様々な課題がありますが、プリの子どもたちが、これからもキンダーガルテンスクールで行われているような教育が長期的に受けられるように、微力ながら協力し続け、祈り続けていこう、と今回のプリ訪問で心を新たにしました。プリ訪問の機会を与えられ、本当に感謝しております。ありがとうございました。

子どもたちの未来を

恵泉バプテスト教会　高良相子

3 年ぶりに訪れたプリの町は何も変わっていませんでした。しかし、ナオミビルティングを入るとそこには輝いていた子どもたちの笑顔、楽しい歌声はありませんでした。現実を確認し、それぞれ地域に散っている子どもたちの未来に希望を祈りました。しかし、建物の中は新たな研修施設として用いられるために様々な準備がされていました。きれいなテーブルが並べられた食堂、二階に上がると子どもたちの使ったベッドにはカラフルなデザインの様々なカバーや枕が用意され、窓には網戸が施され、トイレもきれいに改修されて研修施設としての稼働が始まるところでした。まだまだ設備を整える必要があるといわれ、用いていただけるよう祈るばかりです。

昨年 4 月に開校したプリ・ギンダーガルテンスクールの開校式が夜行われました。私たちの訪問を聞いて一年近くも待ってくれたわけです。モハンティ先生を中心とするこの働きを支えてくださっている彼の沢山の友人たちに出会うことができ、心強い思いをいただきました。

月曜日と火曜日私たちはスクールの子どもたちを訪問しました。2 歳半の子どももいました。あの写真の通り、大きなリュックサックに制服姿が何とも誇らしげに見えました。「Christian organization of development and education(CODE)」が主催する働きとしてホールの壁に十字架が掲げられていたのをしっかりとみてきました。私の訪問

したクラスは、一番大きな子どものクラスで 4-5 歳児 15 人くらいでした。英語の力を身に着けるということを一つの課題にしているようです。事実、英語ができると何か仕事を見つけることができるという社会です。子どもたちは先生の声に唱和しながら、言葉を覚え、英語の歌を歌い、本当に楽しそうに皆先生に付いて集中していました。私たちも一緒に「むすんで、ひらいて」を遊びました。プレイタイムは、室内も屋外でも大いに一緒に遊びました。この子どもたちが教育の場に出会うことができた事にモハンティ先生の熱い思いを感じずにはいられませんでした。

私たちは２，３回か先生と懇談をしました。これから先のことを本当は心配する私たちに先生は正直緊張の中にあることを話してくださいました。それは開校に至るまでの厳しい政府との戦いがあったからです。現在のヒンドゥー至上主義のモティー政権下にあっても、何とか貧困の中にある子どもたちに、主にあって教育を受け、貧困から脱出できる力を持つようにとの強い願いが彼にはあります。それが彼の神さまから与えられた使命であるとの強い信仰が伝わってきます。執拗な政府からの要請に忍耐しながら女性連合の支援によって与えられている建物を守り、子どもたちを守ろうとした彼の苦闘をお聞きしました。その証の中で何より私に響いてきたのは、一人苦闘する先生に主は「何をもがいているのか。私が自分の働きを辞めるのだ。その働きはあなたのものではい」との声にはっとさせられたと言われた時でした。悔い改めを与えられた先生に、主はキンダーガルテン開校のドアを開かれていました。右のドアが閉められて時、左のドアが開かれる証は、三十数年前、かつての婦人連合との出会いの時にも語られた言葉でした。キンダーガルテンの働きも神が先行してくださっていると平安をいただき、これからも祈りを共にしていきたいと思います。イザヤ 41:10-13

◎子どもたちとの交流

神さまの働き

相模中央キリスト教会　丁野雅子

多くの経験をいただいたプリの旅から 1 か月になります。インドとはまったくかけ離れている日本の日常の生活に帰って、その中でインドでの出会いがだんだん遠くなっていく感覚です。そのような私にとって、里親の会と女性連合が続けてきた 30 年の支援の歴史は驚くべきことで、本当にすごいことだと思います。そして子どもの家の働きを続けてこられ、またあらたな働きをはじめたモハンティ先生の使命感。私はこれから何かを 30 年つづけていくことができるだろうか、と考えます。プリ、インドでの出会いがどのように

私の中に残り、これからのかかわりになっていくのだろう。

印象的だったのは、子どもの家の時代を知っている高良相子さんが、最初の夜訪れた男の子が使っていた施設・ナオミビルディングで、今の施設ががらんとして子どもの存在がないことに涙を流されたことでした。ここに子どもたちが大勢いたこと、そしてそれが失われていること。過去を知らない私にはその想像がありません。また、政府による宗教弾圧がどのようなものかの想像、そしてインドという土地、環境に対する想像。幼稚園に通う子どもたちが家庭に帰ってから、「ジーザス」などキリスト教の言葉をつかうと問題になる、またスラムに住む子どもたちが、日本からのお土産を持ち帰った先できょうだい、そして近所の目にどう映るか、そこまで考えないといけない。自分の想像力の貧しさを感じました。

今目の前にいない友の状況を考えること、覚えて祈ること、どうしたら続けていけるだろう。そのためには関わり続けること、知り続けること、出会い続けるしかないのではないかと思っています。「数ある働きの中で、なぜプリ子どもの家の支援だったのか、それは出会ったから、そしてキリスト者の出会いはその背後に神さまが働いておられることなのだ」、と小林洋一先生が分かち合いの中で、出会いについてお話しくださいました。その出会いを大切にしていきたいと思います。

厳しい政治状況の中で、規制に抵触しないよう知恵をつくし運営されているキンダーガルテンスクール。そこには蛇のように賢く、鳩のように柔和な、キリスト者の生き方があらわされていると思いました。それは 4 年間もの政府からの圧力を受けてきた中で、生み出されてきたもの。戦わずしてその知恵には至らないし、使命をはっきりともっていないと続けられない。神さまの働き、その具体を見た思いがしました。人が妨げても神さまの働きはあらわされていく、その中で神さまはかならず道を教えてくださるのだということを教えていただきました。日本も状況が厳しくなる中、どのようにキリスト者としての生き方を表していくことができるだろう。プリ・第一バプテスト教会でささげた礼拝、小林洋一先生がコヘレトの言葉 4 章 1~12 節から語られた。虐げられている人を慰める者がいない不幸、共に労苦することへの報い。30 年、インドの友を慰める者としての働きが日本で続けられてきた、そのことを教えられました。わたしも「慰めるもの」になりたい、そのような思いをいただきました。

イエス・キリストと名を呼ぶことがかなわなくても、そのイエス・キリストが教えた祈りを共に祈ることができる。今主の祈りを祈っている子どもたちがインドにいることが希望です。

◎訪問したクリスチャンの村で 最長老の方と

神さまへの祈りによってつながれた関係

浦和バプテスト教会　中嶋名津子

1999 年にひとつの劇の脚本を書きました。モハンティ先生がどのようにイエスさまに出会い、そしてプリ子どもの家をどんな思いで設立しようとし、どんな人が支援するようになったか、私たちのささげる献金がどんな働きに用いられているか、という内容の劇でした。これは同年、モハンティ先生が来日されて、その時に話してくださったお話をもとに作ったものです。インドから帰って、この脚本をもう一度読み返してみましたら、実際の町の景色が重なり、深い感動がわいてきました。少年だったモハンティ先生が必死で祈った浜辺はあそこかな。祈ったのに試験に落ちたことで神を恨み、「神は犬だ」と教会の壁に落書きしたということだったけれど、町で寝ていた野良犬の、あんなイメージだったのかな、とか。読み書きや計算を学んで、のびやかに成長している子どもの家の子どもたちの姿は、今はキンダーガルテンスクールに通ってきている子どもたち（写真）と重なりました。車で 1 時間半も行った村の教会で会った子どもの家卒業生(写真)との出会いも感動的でした。

ゆっくりとモハンティ先生のお話を聞く機会がありました。「教育によって人間性が発展していくのです。人は愛によって与えることを学びます。日本の女性会の方々は会った事もないインドのこどもたちに愛を示してくださいました。日本を訪問したときにお会いした高齢の女性は寝たきりでしたが、ベッドの上で編み物をして、その収益を献金してくださっていたことを知って深く感動しました。子どもの家を閉鎖しなければならなくなったとき、私は助けてくださいと主に祈りました。そうしたら『あなたのプライドを捨てなさい。ここはわたしのもの、あなたのものではない』と主が答えてくださいました。どうか私たちの働きが主のみこころにかなったものとなり、必要な活動が続けられるように祈ってください。祈りは宝です。祈りはつながりを生み出します。」

小林洋一先生が「支援を必要とする人は世界にたく

◎子どもの家時代からのスタッフ　トゥルトゥルさんと

さんいる。プロジェクトもたくさんある。では、なぜインドに、プリ・キンダーガルテンスクールに支援をするか、それは出会ったからです」とおっしゃいました。ひとつの出会いが祈りによってつながれて、広がり深まって、30 年以上も続けられていること、その働きを直にこの目で見ることができたこと、神さまに心から感謝します。

その方の名はイエスキリスト

浦和バプテスト教会　船本実幸

「尊いイエス様のお名前をとおしてお捧げいたします。」先生のお祈りにあわせて園児たちが元気に唱和する。浦和バプテスト幼稚舎の日常のひとこまである。しかし、この言葉を子どもたちが発することがかなわない場所がある。それが今回私たちが尋ねたプリキンダーガルテンスクールの現実だった。

2 月とはいえ初夏のようなまばゆい朝の光の中で、子どもたちが先生に率いられ整列し、「主の祈り」を捧げている。手を組み合わせみんなで唱和する。「主の祈り」の中にイエスキリストの名はでてこない。それぞれが自分の「主」に祈りを捧げている。だから政府からキリスト教のプロパガンダだと言いがかりをつけられることはないとモハンティ先生が語る。ヒンズー原理主義者からなる現政権下では「子どもの家」時代とは異なり、社会が直接スクールの中に入ってくる。神経を張り詰めながらの舵取りを強いられているのだ。

2017 年 4 月に開校したスクールだが、多忙な里親の会スタッフたちを慮り、2018 年 2 月まで開校式が引き延ばされたと知った。開校式では里親の会代表の松本素代美さんによるテープカットが行われ、メンバー一人一人が名を呼ばれて登壇。色とりどりの花で編まれたずっしりと重いレイを子どもたちから首にかけてもらうという歓迎を受けた。

華やかな式典の中で最も時間が割かれた Vote of Thanks で、スクールの開校を支援した一人一人が表彰を受けた。プレゼンターとしてのモハンティ先生が、唯一こみ上げる思いを抑えられず声を詰まらせたのが「長年寄り添い、忠実に仕えてくれた沈黙を知っている人」、「子どもの家」時代から 30 余年、ずっと仕えてくれたトゥクナさんを紹介した時であった。私たちが先生を訪ねた最初の晩、門を開け、インド風の両手を合わせるスタイルで挨拶してくれたのが彼であった。スクールを最初に訪問した際には、帰りの足を心配してモハンティ夫人がオートリクショーに乗るように、と提案した時に手配をしてくれたのも彼だった。最初はヒンズー教徒であったが、モハンティ先生が弟子にしたのだそうだ。声を聞くことはほとんどないけれど「黙って何でもやってくれる、ひたすら忠実な弟子」トゥクナさん。

「ここでは本当に一人一人が大切にされていますね」と先生に投げかけると「自分がい

なくてもスクールは大丈夫だが、彼らがいなければ一日も回っていかないからね」と笑った先生。そうかも知れない。しかし子どもの親のほとんどが読み書きができないコミュニティの中で、ここにない何かを起こしていくことがどれほどエネルギーを要し、大きな（主に対して）責任を伴うことか。「子どもの家」閉鎖の最大の理由が政府からの連日の監査、出頭命令に疲弊する中で、子どもたちが放置される現実をどうすることもできなかったから、と語った先生。絶望の中で祈りながら、これは神の業であって、決して自分がなしているのではない、と深く悔い改めながらプライドを捨て、主の主権の前にただただひれ伏された。「昔のことは忘れなさい！私も忘れました」「新しいドアが開かれた」と語られた先生。

キンダーガルテンスクールで無邪気に笑い遊ぶ子どもたちが、成長して福音に触れた時、あの時食べ物や着る物を与え、文字や数を教え、一緒に遊んでくれ、不思議なたとえ話やお祈りを教えてくれたその方が、人を通して働かれるイエスキリストという名の神であったことを知る日がいつか来ますようにと祈らずにいられない。

◎プリ・第一バプテスト教会の 教会学校の先生たち

遠いインドで

長住バプテスト教会・ツアーチャプレン　小林洋一

今回で、わたしのプリ訪問は３回目となります。飛行機で福岡からバンコク、バンコクからバンガロール、バンガロールからブバネーシュワル、ブバネーシュワルからプリまでは車で約１時間。プリはやはり遠い地です。

日本バプテスト女性連合、そして「プリ子どもの家」の里親の会は、このように遠く離れたインドのプリという人口約 20 万の田舎町の子どもの家を長期にわたり支援し続けてきました（女性連合は 31 年も！）。

子どもの家は、遠隔地の部族の貧困家庭の子どもたちを寮に引き取り、公立学校に通わせるという活動をしてきました。政府の政策変更による 2017 年の閉鎖に至るまでに 309 人が寮生活を共にし、寮生の 292 人がキリスト信仰を言い表したと聞きました。驚きです！

日本バプテスト連盟は、アジアに限れば、インドネシア、タイ、カンボジア、そしてシンガポールに、友愛と連帯の手として宣教師を派遣してきました。確かに、わたしたちは遠いインドに宣教師を派遣して来なかったのですが、今回の訪問を通して、子どもの家の

主事モハンティ牧師夫妻は、わたしたちの宣教師でもあった（である）との思いを強くしました。

子どもの家の男子寮があったナオミビルディングは、ベッドやトイレが綺麗に改修され、さらにはホールの天井に、シーリングファンが取り付けられたりして、研修センターとしての整備が進んでいました。すでに研修グループの受け入れを開始しており、アッセンブリー・オブ・ゴッドのグループが研修に使ったとのことです。ただ、夏の間は、シーリングファンだけでは猛暑対策には不十分なので、ゆくゆくは冷房設備の設置を願っていました。現在、キリスト教の機関紙等に広告を載せて集客に励んでいるとのことでした。

CODE（「発展と教育のためのキリスト教機関」）によって新たに開設された、プリキンダーガルテンスクール（以下「幼稚園校」）は、プリバプテスト教会（プリで唯一のバプテスト教会）の敷地内にあり、かつての子どもの家の女子寮を園舎として使っています。３クラス 50 人の小さな学校です。この幼稚園校は、話を聞く限り、日本での学校法人化した教会幼稚園に近い感じがしました。

子どもの家は、学校ではなく私塾的寮だったので、そこでのキリスト教教育は、外から何の制限を受けることなく自由に行うことができました。しかし、幼稚園校の児童は、圧倒的多数が地元のヒンズー教徒家庭の子どもたちなので、彼らをキリスト教に改宗させるための施設、という不審や非難の口実を与えないように細心の注意を払って運営されていました。

日本のキリスト教幼稚園・学校でも、圧倒的多数の非キリスト教家庭から来る子どもたちに、信仰の強要や勧誘をしないということを前提にしていて、例えば、キリスト教の礼拝形式によるチャペルも心と精神を涵養する「教育プログラム」と位置づけて行っています。しかし、プリでの、その前提に対する神経の使いようは日本の比ではないと感じました。今、インドでは、ヒンズー教徒のファンダメンタリストが、キリスト教に対する圧迫、迫害を強めています（イスラム教に対してはより過酷に）。他の地域では、教会の焼き打ち事件も起きています。新生したこの幼稚園校の舵取りには、インドでのキリスト教が直面する厳しい現実が影を落としています。

貧困家庭の子どもにキリスト教を基盤とする教育を無償で提供することで貧困の連鎖を断ち切る、という子どもの家の経験と遺産は、幼稚園校にも引き継がれ、地域の支持を得て収容人数を上回る希望者が出ているとのことです。

現在、幼稚園校の運営資金は、「日本からの支援」、「研修センターからの収益」、そして「海外および地元の支援」の３本柱からなっていますが、後者の２つからの収益や寄付は未だ少なく、日本からの支援なしには、立ち行かないのが現状です。その日本からの支援ですが、

◎子どもたちとの交流　隣はモハンティ先生のお連れ合いブルブルさん

2016 年の子どもの家の閉鎖とともに女性連合からの支援も打ち切られたため、2016 年、2017 年は、里親の会の支援のみとなり、幼稚園校は厳しい財政状況でのスタートとなりました。2018 年には、女性連合からの支援が復活することになりましたが、これまでの 100 万円から 10 万円への減額が決まっています。日本からの支援の減額の現状を踏まえて、CODE は、研修センター収益のアップも含めて一層の自助努力が必要とされています。

学校は即効性を求める場ではなく、種蒔きの場です。幼稚園校で学ぶ子どもたちが、困難な状況の中でも蒔かれ続ける福音の種子を心のうちにとどめて成長し、将来卒園者同窓会を開くことができるように、そして遠いインドが少しでも近くなるように、息の長い支援ができればと願っています。（2018.3.23 記）

プリ・キンダーガルテンスクール　訪問スケジュール

2 月 8 日(木)
バンコク空港バンガロール出発ゲートカウンターに集合・簡単な打ち合わせ・自己紹介や食事で打ち解ける
バンガロールでスブさん（モハンティ先生の息子）が迎えてくださる。ホテルへ

2 月 9 日(金)
バンガロール～ブバネシュワール着　モハンティ先生が迎えてくださる。車でプリまで移動（約 1 時間）

ナオミビルディング訪問。リトリートセンターとして改修
モハンティ先生のお宅で歓迎夕食会

2 月 10 日(土)
モハンティ師とミーティング・日本からのお土産準備
18：00 からプリ・キンダーガルテン開校式参列

2 月 11 日(日)

プリ・バプテスト教会・教会学校参加

主はすばらしい賛美・手話賛美奉仕

プリ・バプテスト教会礼拝参加

小林洋一先生礼拝メッセージ

2 月 12 日(月)

午前　キンダーガルテンスクール訪問

奉仕：歯みがき指導、主はすばらしい・賛美、自由遊び

（北海道メンバー3 人は帰国の途に）

午後 35 キロ離れた村を訪問（村の 170 名 40 家族全員がクリスチャン）歓迎をうける。Ashrayapur バプテスト教会　モハンティ先生が 10 年前教会の無牧師だった時代にひと月に一度訪問しメッセージを担っておられた。

2 月 13 日(火)

キンダ―ガルテンスクール訪問

モハンティ師とミーティング・

分かち合い

ブバネシュワールへ移動

ブバネシュワール発～バンガロール着　ホテルに移動

2 月 14 日(水)　ホテルをチェックアウト後スブさんの案内で

バンガロール観光

2 月 15 日(木)

帰国　関空 15:45　　成田 15:50　福岡　8:00 (翌 16 日)